

## 編集後記

先号の「ニューアーバニズム入門」はいかがでしたか。追加注文も多くあちこちで話題になったようです。小泉内閣も「都市再生」をうたっておりますが、都市も田園も農山村も「環境」という目から見ると問題が数多くあります。真剣に「環境」に取り組むことが「経済」を救う道であるように感じます。

前回に続き特集を組みました。「まちなみ計画の新潮流」です。本誌でも取り上げたように、来年英国で行われるレッチワース100年イベントのプレ・イベントとして「新田園都市国際会議」がつくばと神戸で行われます。この100年の近代都市計画の成果は何であったのでしょうか。用途混在のない健康な住宅地、スプロールとの戦い、自動車との折り合いなどさまざまなテーマに取り組んで「進歩」を謳歌してきました。いま地球環境の問題というグローバルなテーマに加え中心市街地問題、家庭崩壊、地域崩壊といった課題も住まい・まちづくりの問題として突きつけられているのだと思います。これまでの「都市計画」「住宅計画」という枠組みを超えた「住まい・まちづくり」の計画や活動が求められていると思います。

この特集では前号に引き続きアメリカのニューアーバニズムの動きをフォローしています。ちょっとしたニュースといっていると思いますが、川村健一氏のご縁でP・カルソープ氏が本誌に特別寄稿してくれました。彼の最新の著作『リージョナルシティ』に対する自らのコメント、思いのたけを述べております。また渡和由氏が6月にNYで行われたCNU（コンGRESS・フォー・ニューアー

バニズム）総会の実況報告と先号のDPZインタビューの追録を書いてくれました。西山徳明氏は「NUにみるまちなみの形成と再編」と題しNUが既成市街地の再生を含む都市全体の計画に対し発言を強めている状況を報告し、NUの中でもとりわけ大量交通機関を重視するTOD（Transit Oriented Development）型の開発によってつくられたTV（Transit Villages）という概念が重要であることなどを述べております

特集のもうひとつのテーマはイギリス発です。都市計画家ピーター・ホールの著作『ソシヤブルシティ』が関係者の間で話題になっています。中井検裕氏に内容とその意味について執筆していただきました。成熟し、安定していると思われているイギリスにおいても新たな住宅不足、開発と保全が問題となっていることに驚かされます。21世紀も都市と田園が大きなテーマであることを予感させます。また新田園都市国際会議の主催事務局で多忙を極める齊木崇人氏が合間をぬって「レッチワース」の今日的意味を問いかけています。

蓑原敬、大野秀敏、小嶋一浩という多彩な顔ぶれが都市と建築の間を自由に行き来する異色の座談会もお楽しみいただけたと思います。

まちなみ計画はミサワホームの「オナズビル」の紹介です。これらハウスメーカーの作品も含めた「工夫された住宅地」がいよいよ出版の運びとなりました。書名は『日本のコモンとボンエルフ』です。財団の20周年を記念して行われた膨大な調査結果を取りまとめたもので、日本経済新聞社から発売されます。実務家、研究者などのお役に立つものと確信しております。

(大川 陸)